

〈中学生クラス修了生の学習リソース（人的リソース）調査報告書抄録〉

1. 調査の概要

(1) 調査の対象

調査対象者は所沢センター中学生クラス退所者で以下2つの条件にあてはまる者とした。

- ①センター退所後、中学校に編入された者。
- ②退所後3年程度経過した者。

その結果以下の4名を対象者として調査を依頼した。

- 事例A センター退所時 18歳中3に編入 調査時 20歳高3 退所後 3年5か月
- 事例B センター退所時 16歳中3に編入 調査時 19歳高2 退所後 3年1か月
- 事例C センター退所時 15歳中3に編入 調査時 18歳高3 退所後 3年5か月
- 事例D センター退所時 17歳中3に編入 調査時 19歳高3 退所後 3年1か月

(2) 調査方法

- ・調査の形態・半構成的面接法による訪問調査（メモ・音声テープ等の記録は取らず、訪問後回想し記述する。調査対象者支度付近の喫茶店で行う）
- ・面接の方法・調査対象者に「気持ちを語ってもらい、センター修了後何が起こったか教えてもらい」というスタンスでインタビューする。
調査目的である人的資源に応じた質問を事前に準備した上で進めるが、質問項目は絞切り型ではなく、臨機応変に展開していく。

・使用言語・日本語

・調査所要時間・1時間程度

対象者の集中力の持続や時間的な負担を考慮し、1時間程度と目安を決めた。

・調査までの段取り

1994年6～7月・面接練習

現在作成済みのフェイスシートから、調査対象者4人の状況を想定して話題への介入の仕方をシュミレーションする

7月・調査対象者への電話連絡調査の依頼

7～8月・調査実施（調査対象者の夏休み）

8～9月・調査のまとめ

(3) 調査内容

- ・センターを修了してから現在までの経過
- ・その間に関わった人、特に本人に大きな影響を与えた人
- ・関わった人との関係性

◇関わりの内容

〈学習に関する関わり〉 ----- (日本語面、学科面)

〈心理的なことに関する関わり〉 ---- (思春期の悩み、アイデンティティ、対人関係)

〈情報に関する関わり〉 ----- (生活面、学校、進学、日
社会情勢)

〈遊びに関するかかわり〉 ----- (趣味)

◇関わり方

2. データの分析

(1) データの分析方法

記録として残した音声テープを文字化し、各カテゴリーについて、調査対象者と関わっている人を抜き出した後、表に転記した。表の縦にはカテゴリー項目、横には時間の経過を表した。関わりの頻度は線の太さで表し、一番太いものから、ほぼ毎日、1週間に2～3回程度、1週間に1回程度、1か月に1回程度、1年間に数回程度の5段階で示した。人的リソースの利用が、主に対象者自身からの働きかけによる場合には実線で、主に相手からの働きかけによる場合は点線で表した。また、インタビュー中に話の中に登場はするものの、あまり接触のない人物については矢印をつけて区別した。接触方法は電話、手紙、会うことの3種類いずれについても、1度の接触を1回と数えた。性別の判明する者は記号で表した。

(2) 結果への考察

各事例について簡単にまとめる。

① 事例Aについて

Aさんの人的リソースの活用をみると、市役所派遣の日本語教師や同級生たち、アルバイト先友人と長期に接触をもっていることが特徴的である。日本語教師は学習、心理、情報の3つでリソースになっている。編入直後の日本語能力があまり高くない時期に、自分から同級生に働きかけて、わからないことを聞く、一緒に遊ぶなどの行為にはかなりの積極性が要求される。「編入直後はしばらくは同級生の話す日本語を聞いて日本語の使い方を観察していた。」「日本人同級生と一緒にいると、すべて日本語で話すことから日本語の勉強になると思う。」の発言から、Aさんは同級生やアルバイト仲間との接触を楽しみながらも、日本語学習も目的の1つとして考えていることがうかがえた。

② 事例Bについて

Bさんの人的リソース利用は高校2年生から活発になっている。高校1年生半ばまではセンター修了生が電話でのよき相談相手として存在するくらいである。相談相手の修了生も当時Bさんと同時期に中学校に編入されているのだが、10月頃には中学校をやめている。Bさんの事例は、いじめの対象になってしまうこと、日本語で意思疎通が難しいこと等、編入直後は帰国生徒にとって抱える問題の多い時期だということを示している。

③ 事例Cについて

Cさんの関わる人は帰国同級生と隣人が主である。親しい日本人同級生はいない。美術部に入ってもみたが、日本人の親しい友人はできなかった。美術部は個人活動が多いことも原因かもしれない。同じクラスに帰国者がいなかった1年の時は日本語を話したが、2年からは学校でも家でも中国語を使うので、日本語が下手だと言う。実際にはCさんの話す日本語は文型や表現が豊かで、日本人との意思疎通に支障がないほどに上達しているの

だが、インタビュー中にも文法が間違っていないか、発音が通じるかどうかを何度も気にした。日本語にも学力にも問題がなく、高校でクラス単位でみると、適応していると見受けられるだろう。しかし、内面の不安はとても大きく、将来日本に住みたくないともらず、Cさんの不安は何に起因するのだろうか。

④ 事例Dについて

帰国者仲間にも日本人にも親密性の高いリソースを持っている。情報も豊富で日本人と帰国者の両方の輪に入っている印象を受けた。高校で帰国者先輩と知り合ったこと、洋上セミナーに参加したことによって興味が近い日本人の友人をもてたことが、彼女の人的リソースの利用を深くしている。

(3) まとめ

4事例4様に人的リソースの活用をし、懸命に学校生活を送っている。センター在所中は協調性がなく、適応が心配された者が多様な人的リソースを持ち、将来の夢を語る。一方では、明るい性格で友達もたくさんできるだろうと予想された者が、予想と反して、限られた範囲で活動し、将来に対しても大きな不安を持つ。そこには、社会的リソースの提供の有無、本人の性格、中国で身につけた対人行動様式、所属した学校の環境や文化等の要因が絡んでいると思われる。人的リソースの活発な活用は教科学習、日本語学習、友人関係づくり、進路探索、有形無形の高校生文化の無意図的学習に影響する実感を得た。今後、人的リソース研究の課題としては、より多くの事例を収集することのほかに、人的リソース活用による、学校・学生生活適応の効果を測定する方法を研究すること、及び、教育現場において人的リソースの活用と形成について、どのような積極的方策がとり得るかについての実践的研究が欠かせない。